

「葦」第40号発刊に寄せて

奈良県立医科大学附属病院

病院長 榊 寿 右

このたび看護研究の活動報告である“葦”第40号が発刊されます。医療が年々高度化し、患者の要求度が増大してゆく中で、看護の質や内容も高度化されて行かねばならない状況です。病院も電子カルテが導入され、至る所でIT化が進んでいますので、看護師さんもITに十分に対応していけるように訓練されないと大学病院としての看護活動はできないでしょう。一方、IT化が進むことによって人と人との触れ合い、特に心の触れ合いが欠如していく傾向にあります。病院は医療を受ける人とそれを提供する人の触れ合いの場であり、他のどの分野より、より濃厚に人間性が求められる場でもあります。

看護研究を行い、それを報告し、看護活動に応用してゆくことは特定機能病院としての大きな使命です。本学には看護学科があって、そこには専任の教官がおられますが、私ももっともっと看護学科と附属病院看護部との共同研究が進んだら良いと願っています。そして、講義に附属病院の看護師がかなり加わるようになったとは聞いていますが、附属病院の看護師長や主任クラスの人たちだけでなく、認定看護師や専門看護師も看護学科の教育にも携わり、学生との係わりも深くなれば、本学学生の本学附属病院への就職状況も多くなり、同時に研究心（リサーチマインド）を持った看護師の増加にもつながるものと信じています。そして質の高い看護研究の推進にも役立つことでしょう。

葦はイネ科の多年草で各地の水辺に自生し、世界で最も分布の広い植物であり、地中に扁平な根茎を走らせ大群落を作ります。本研究誌が何故“葦”と名付けられたか知りませんが、大群落を作ることから研究の大群落を意味しているのでしょう。そしてそのことが営々と続けられ今回で40号となります。この看護研究がもっと幅広く行われ、益々レベルの高いものになっていくことを望んでやみません。